

後記

○紀要について、対照的な二つの声を聞いたという話を聞いたことがある。一つは「紀要は研究歴の浅い若手のための発表媒体として意義がある。ベテランは執筆を控えるのが筋だ」という声であり、もう一つは「専任教員はみな、紀要に対して、執筆特権と等量の執筆責任を負う」という声だというのが、おそらく二つとも都市伝説であろう。教員の実務負担が年々増加の一途を辿っている中で、紀要に執筆する権利と執筆しない自由の両方が等しく保障されているのでなければ、お互い窮屈で仕方がない。研究者集団としての学科のセンターステージである紀要の重要性に対する認識は、もちろん全員が共有している。専任教員の繁忙が改善され、各自の研究時間を保障し合えるような環境の整備こそが、紀要の充実にとつても焦眉の課題である。

○本号は多数の寄稿が得られたと言いがたいが、林達也名誉教授からもひき続いて玉稿をいただき、昨年とはほぼ同じボリュームを維持することができた。編集委員としては安堵の胸を撫でおろしている。『駒澤國文』が国語学と国文学の分野における刺戟的な知の発信基地として、一層の飛躍を遂げる日がくることを切望したいと思う。

○今年の国文学大会は、これまで共催団体だった国文同窓会休会後の最初のイベントとなったが、少し趣向を変え、上

方講談でご活躍中の旭堂南海師をお招きして、十二月にふさわしい「赤穂義士物語」を読んでいただいた。国文学大会で舞台や高座からゲストをお願いしたのは、文学座女優寺田路恵氏の一人芝居『にぎりえ』以来である。地上波テレビから忠臣蔵が姿を消して久しい今日、「大石内蔵助」という名前すら耳にしたことがない学生も少なくないが、緩急自在の絶妙な氏の話芸に会場の学生たちは冒頭から魅了され、初めて聴く赤穂義士の世界を新鮮に堪能していた。再演を望む声も多い。古典芸能は国文学科にとつて必須のジャンルであるが、文字媒体や映像画像だけではなく、身体と肉声を通したライブに接することの価値と魅力をあらためて認識させられた。遠路ご来演いただいた南海師に謝意を表したいと思う。(T)

編集委員 高田 知波

田中 徳定